

グローバル化時代の国際教育交流プログラムの在り方
— 韓国の 4 大学の事例から —International educational exchange programs in the era of globalization:
A case study of four universities in South Korea

渡部 由紀・金 性希

要旨

本稿の目的は、大学の国際化を積極的に促進している韓国の 4 大学の国際教育交流の取り組み事例を分析し、グローバル化する社会における国際教育プログラムの在り方を考察することにより、日本への示唆を得ようとするものである。4 大学は今後若者の誰もがグローバル化社会への適応が求められるということを念頭に国際教育交流に取り組んでいた。これら 4 大学の取り組みを分析した結果、以下のような 3 つの共通の特徴を見出すことができた。1) 海外派遣の機会の拡大と多様化、2) 留学生及び国内学生への国際的な教育機会の提供またその準備としての英語による科目の充実、そして 3) 大学付属の語学堂（語学学校）での韓国語教育科目（外国語としての韓国語習得）の提供である。韓国の大学が世界的高等教育ネットワークの中で推進するグローバル化時代の国際教育交流の取り組みは、その派遣学生数の規模の大きさと近年急速に増加する受入留学生数から、日本の大学にとっても参考になる点が多くある。

キーワード：国際教育交流、海外派遣留学プログラム、短期留学生受入プログラム

1. はじめに

過去 10 年間の世界の留学者数がグローバルな規模で増加する一方で、日本人学生の留学者数は減少傾向が続き、学生が内向き志向にあることが指摘されてから久しい。政府の国際教育交流政策もこれまでの留学生受入中心の政策から、国内学生派遣重視の政策へと転換し、国際的に活躍できるグローバル人材育成のための施策が導入され、大学も新たな教育プログラムの開発と実施に取り組んでいる。文部科学省が OECD、ユネスコ統計局、Institute of International Education のデータを基に公表している日本人の留学者数は 2005 年以降減少しているものの、日本学生支援機構の「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」データによると、大学間の学生交流協定等に基づく日本人学生の留学者数は増加している。2004 年には 18,570 人だったのが、2012 年には 43,009 人となり（2.3 倍）（日本学生支援機構, 2006; 2014）、大学の取り組みの成果が表れてきていると言えるだろう。しかしながら、OECD の「Education at Glance 2013」によると、日本の高等教育機関に在籍する学生のうち、海外留学する学生は 1.0% に留まっており、OECD 加盟国 33 カ国中（ルクセンブルクを除く）、アメリカ（0.3%）に次いで最も低く、今後より一層学生が海外で学ぶための多様な機会の提供が望まれる。

一方、韓国の場合、海外留学する在学生の割合は4.0%でOECDの平均（2.0%）より高く、年々国内学生の海外留学者数は増加している。なお、韓国内における外国人留学生数も過去10年間増加傾向にある。本稿では、このように外国人留学生の受入と国内学生の派遣ともに増加傾向にある韓国において、大学の国際化を積極的に促進している4大学の国際教育交流の取り組み事例を報告する。さらに事例大学のグローバル化する社会にむけての国際教育プログラムの在り方を考察することにより、日本への示唆を得ようとするものである。

2. 韓国における国際的な学生交流の動向と政策

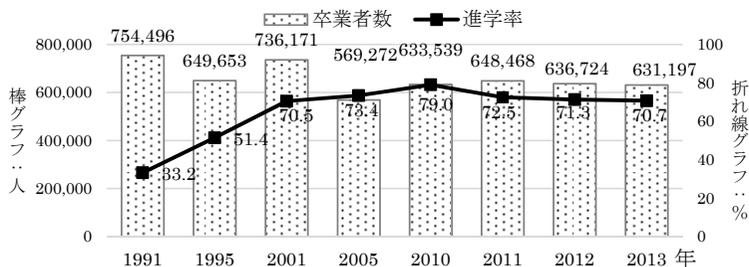
グローバル化時代に備えて、韓国の大学が取り組んでいる国際教育交流プログラムの事例を考察するにあたり、韓国の国際的な学生交流の動向と政策を押さえておきたい。まず、国際的な学生交流を議論する上で重要な韓国の高等教育の規模とキャパシティについてであるが、韓国における高等教育の量的成長は1970年代以降2000年代半ばまで急速に進み、その後は18歳人口の減少や大学構造改革による規制などもあり、高等教育機関また学生数の増加はほぼ横ばいとなっている。2013年現在、高等教育機関数は433校であり、そのうち一般大学と専門大学の数はそれぞれ188校と140校である。設立形態別では、国立大学は34校（うち、一般大学32校、専門大学2校）、公立大学は8校（うち、一般大学1校、専門大学7校）、私立大学は286校（うち、一般大学155校、専門大学131校）となっている。日本と同様に韓国においても、私立大学の占める割合が高い（約87%）。また2013年度現在の学生数については、3,709,734人である。そのうち、4年制の一般大学および専門大学の学生数はそれぞれ2,120,296人（約57.2%）、757,721人（約20.4%）となっている。

進学率は1980年代の高等教育の大衆化に伴い、20~30%となり、1995年には51.4%に達し、早くもユニバーサル段階に入った。その後も進学率は急増し、2010年には79.0%と過去最高を記録した。しかし2011年からは減少傾向にあり、2013年現在の進学率は70.7%となっている¹（図1）。そのうち、大学への進学率は45.9%（海外大学を含む）である。近年、減少傾向にあるものの、依然として高い進学率であると言えるが、2012年の高等教育在籍学生数も減少に転じており、今後少子化による18歳（高校卒業生）人口の減少は進展する見通しである。韓国教育部によれば2013年度の入学定員559千人を基準にした場合、2018年度には韓国の大学システム全体における定員割れが予測されている。2013年現在、新入生に対する定員充足率は一般大学98.6%、専門大学97.5%であり、定員割れの96.0%が地方大学で見られ、そのうち専門大学が51.5%を占めており（韓国教育部、2014）、国公立よりは私立が、首都圏よりは地方所在の大学における定員割れの問題

¹ 進学率減少の背景としては、進学率算出基準となる進学者数を2月の合格者数から4月の登録者数に変えたこと、進学より就業する人数が増加したこと、そして少子化による学生数の減少などが考えられる。

グローバル化時代の国際教育交流プログラムの在り方
— 韓国の4大学の事例から —

が大きいと云える。なお、今後一般大学と専門大学の定員充足率の格差はより広がると予想されるなか、政府は大学構造改革²を一層強めている。



(出典) 韓国経済研究院 (2011) 及び <http://kess.kedi.re.kr/index>

図 1. 高校卒業生数と大学進学率

韓国の高等教育の全体像を見たところで、次に国際的な学生交流に関する動向と政策について述べる。韓国人の留学生数は1991年の5万人程度から2011年には26万人に達し、20年間で約5倍に増加した(表1)。そのひとつの要因として、1994年に国外留学に関する規定を改定し、私費留学を希望する学生に課していた「自費留学外国語試験」を廃止し、高卒以上の私費留学の自由化が促進されたことが挙げられる。長島(2011)は、韓国における海外留学生数の増加は韓国政府の規制緩和による留学条件の改善が寄与してはいるが、積極的な留学奨励政策を取ったわけではなく、学生個人の選択によるところが大きいの点を指摘している。この韓国人学生の留学に対する積極的な姿勢には、1997年のアジア通貨危機によりIMFの管理下におかれた韓国経済が急速にグローバル化し、韓国経済界におけるグローバル人材の需要が高まったという環境の影響もあるだろう。2010年まで急速に増加した韓国人の海外留学生数は、2011年には1万人増加の262,465人となったものの、その後2012年には239,213人、2013年には227,126人で、2年連続減少となっている。減少の原因は世界的な経済不況及び外国の移民法強化などによるものとみられる。なお、韓国人学生の主な留学先は、2013年基準で見ると米国が72,295人で最も多く、次いで中国63,488人、日本18,919人、オーストラリア14,180人である(表2)。

表 1. 国内学生の海外留学生数(学位課程および研修)

年度	1991	1995	2001	2005	2010	2011	2012	2013
海外留学生数	53,875	106,458	149,933	192,254	251,887	262,465	239,213	227,126

(出典) 韓国教育開発院(2007)、e国の指標サイト

(http://www.index.go.kr/egams/stts/jsp/potal/stts/PO_STTS_IdxMain.jsp?idx_cd=1534)

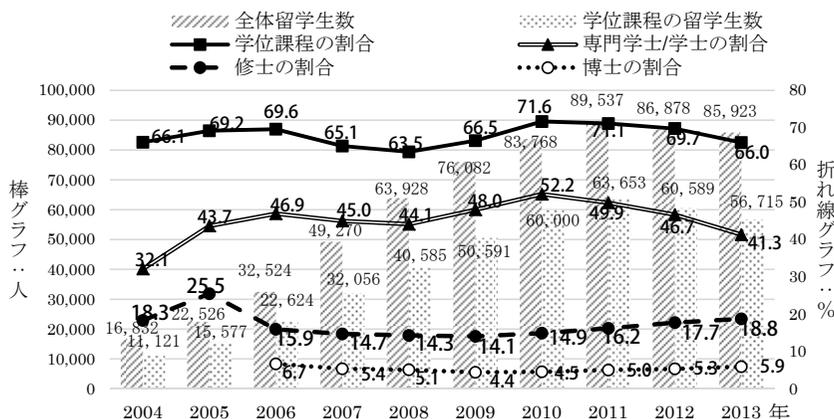
² 朴槿恵政権では2023年まで大学定員16万人を削減するとともに、全大学を評価し5等級に分け、等級別に順次に定員削減を実施するという計画案を発表している(韓国教育部、前掲書、2014)。なお、政府の財政支援事業の採択に定員削減率を連動させることで大学の自律的な定員削減を促している。

表2. 過去3年間の主な留学先

	米国	中国	日本	オーストラリア	イギリス	カナダ	フランス	ニュージーランド	ドイツ	フィリピン
2013	72,295	63,488	18,919	14,180	12,512	12,477	6,325	6,271	5,222	4,668
2012	73,351	62,855	19,994	17,256	12,580	20,658	5,507	8,033	5,280	3,917
2011	72,153	62,957	25,692	33,929	17,310	15,808	5,507	10,289	6,293	3,238

(出典) 韓国教育部 <http://www.moe.go.kr>

一方、韓国における外国人留学生の受入においては、1980年にわずか1,015人であったものが、2000年代に入ってから大幅に増加し、2004年には16,832人となった。20年間で約16倍に急増したことになる。その後も外国人留学生は増加し続け、2011年には89,537人に達した。2012年から2年連続で減少しているが、図2に示すように主に専門学士/学士課程における減少によるものであり、修士及び博士課程における留学生の割合は、わずかではあるものの増加していることが分かる。また、韓国の大学等で学ぶ外国人留学生を出自国別に見ると、表3に示すとおり中国が50,343人で最も多く全体の58.6%を占めている。次いで日本4,344人(5.1%)、モンゴル3,902人(4.5%)、ベトナム2,998人(3.5%)となり、上位10位までに米国とフランスを除きアジア地域が占めている。なお、2013年アジア地域からの留学生の割合は全体の87.6%である。



注：2004年、2005年の修士課程の割合は、博士を含む大学院課程全体の割合を表す。

(出典) 韓国教育統計年報 <http://kess.kedi.re.kr/index>

図2. 外国人留学生の推移

表3. 外国人留学生の国上位10位(2013年度)

国・地域	中国	日本	モンゴル	ベトナム	米国	在中国同胞	台湾	インドネシア	フランス	マレーシア
人数	50,343	4,344	3,902	2,998	2,668	1,970	1,690	916	818	771
割合	58.6	5.1	4.5	3.5	3.1	2.3	2.0	1.1	1.0	0.9

(出典) 韓国教育部 <http://www.moe.go.kr>

過去30年間で留学生数が増加した背景には、2001年に施行された「外国人留学生誘致拡大総合方案」の下に2004年に立ち上げられた政府主導の留学生政策“Study Korea Project”がある。表1と図2をみて分かるように、韓国では国内学生の海外派遣数と外国人留学生受入数には大きなギャップがあり、これによる教育貿易収支の赤字が問題視されていた。さらに、少子化による将来の人材不足が顕在化していた。Study Korea Projectは外国人高度人材の獲得や教育貿易収支の赤字改善を目的に推進されたものであり(太田、2010;長島、2011)、2005～2007年、2008～2012年と二期に渡って実施され、現在は第三期(2013～2020年)に入っている。当初の計画では2010年までに留学生数を5万人に増加することを目標としていたが、2007年にこの目標をほぼ達成したため、2008年新たに2012年までに留学生数を10万人に増加させる目標を掲げた。しかし2012年の留学生数は87,000人で目標値に達しなかった上、初めて減少に転じた。2012年10月に新たに発表された“Study Korea 2020”では、2020年までに20万人の留学生を誘致するという(『中央日報』2012.10.29)。留学生誘致に向けた政府招請奨学生(GKS事業)予算の拡大(2015年まで年間1,000億ウォン)、インド、ベトナム、インドネシアなどの理工系大学院進学のための特化戦略などの施策を導入し、今後は留学生の質を保ちながら、量的拡大を目指す。

3. 4 大学の事例報告

3.1 事例大学と調査方法

今回調査した4大学は、ソウル市所在のソウル大学校、高麗大学校、漢陽大学校、西江大学校で、いずれも国際化に積極的な大学である。4大学とも総合大学であり、ソウル大学校が国立大学法人(2012年に法人化)で、その他3大学は私立大学である。大学の規模はその学生数から西江大学校は中規模大学(学生数:10,000～20,000人)であり、その他3大学は大規模大学(学生数:20,000人超)となっている。2013年の各大学の留学生数(正規課程学生、語学研修生、交換学生他を含む)はソウル大学校2,652人³、高麗大学校2,633人、漢陽大学校2,372人、西江大学校が1,220人で、学生総数に占める留学生の割合はソウル大学校9.5%、高麗大学校8.9%、漢陽大学校10.4%、西江大学校が11.4%となっている。

学生の海外派遣数(単位互換制度により海外大学で単位を取得した学生数(学部のみ))は、2012年、ソウル大学校528人、高麗大学校1,116人、漢陽大学校1,015人、西江大学校349人で、在学生数に占める海外派遣学生数の割合は、ソウル大学校3.2%、高麗大学校5.5%、漢陽大学校6.5%、西江大学校4.1%となっている。

³ 3.1「事例大学と調査方法」におけるデータは大学情報公開ウェブサイト「大学アリミ(<http://www.academyinfo.go.kr/>)」によるものである。なお、高麗大学校及び漢陽大学校のデータは、本キャンパスのデータのみ。

また4大学では、近年外国人教員の雇用に積極的に取り組んでおり、2013年の専任教員数（学部のみ）における外国人教員の割合はソウル大学校4.2%、高麗大学校9.5%、漢陽大学校9.2%、西江大学校7.9%となっている。

調査方法はドキュメント分析とインタビューである。分析対象とした資料は大学のウェブサイト、国際交流に関するパンフレットや報告書などである。インタビューは2012年10月22日～26日に学生交流に関する主要情報保持者であるインターナショナル・オフィスのスタッフ1～2名に半構造化インタビューを実施した。

3.2 国際教育交流プログラムの動向と特徴

国際教育交流プログラムといえば、これまで協定大学間の交換留学や語学・文化研修の短期留学が主流であったが、その形態は多様化してきている。本調査報告では、4大学が実施する様々なプログラムのうち、4大学で近年取り入れられた海外派遣プログラム、留学生受入プログラム、そして国際教育交流の新しい教育モデルとして実施の進んでいる国際共同学位プログラムの現状について報告する。

3.2.1 海外派遣プログラム

3.2.1.1 長期(1～2学期)留学先拡大の施策:訪問学生プログラム(Visiting Student Program)

国際学生交流の基本は、海外の大学と協定を締結し、指定した学生数内で1～2学期間互いの大学で修学させる学生相互交換留学制度によるプログラムである。この伝統的な交換留学プログラムは学生にとって授業料相互不徴収の経済的メリットがある一方で、大学間の派遣と受入数のバランスの取れた学生交換が前提となり、東アジアの学生の間でニーズの高い英語圏への交換留学は派遣先を十分に確保するのが難しい。そこで調査した4大学では交換留学プログラムに加え、訪問学生プログラム(Visiting Student Program)を提供し、主に英語圏の大学に1～2学期の私費留学を希望する学生のニーズに応えている。学生派遣に特化した協定を締結することにより派遣学生枠を増やしたり、留学機会を提供することを目的とした第三者機関⁴による国際的な多国間大学ネットワークを利用して、訪問学生プログラムを提供している。交換留学と異なり、訪問学生プログラムでは訪問先の大学に学費を納めることになるため、各大学は参加学生に対し、自大学の学費を免除するなど、学生の経済的負担の軽減に努めている。

具体的に高麗大学校の取り組みを挙げると、米国・カナダ・英国・豪州の6大学と協定を締結し、訪問学生プログラムを提供している。その派遣者数は大学によって異なる(15、20、30、100人の場合がある)が、交換留学と比較すると、かなり多くの学生派遣が可能となっている。6つの訪問大学のうち2大学にGlobal KU(Korea University) Campusを建設

⁴ 調査した大学はStudy Abroad Foundation(米国インディアナ州認可の非営利教育機関)を利用していった。

し、派遣学生のための宿舎を確保したことが、派遣枠の拡大に大きく寄与している。また訪問学生プログラムの参加学生には、Global KU 奨学金の名目で高麗大学校の授業料を免除し、訪問大学の授業料のみを納める制度を確立している。さらに大学間の協定により訪問大学では授業料減額が適用される。こうした積極的な取り組みにより、2011年度は訪問学生プログラムのみで前期286人、後期323人を派遣している(Korea University, 2012, p.17)。

一方、4大学では受入に関しても訪問学生プログラムを提供しており、学生交流協定の有無に関わらず海外の大学の学生が直接各大学に応募できる。受入要件を満たした学生は、学費を納めて1~2学期間学修できる。2012年度に4大学が受入れた訪問学生数はソウル大学校43人、高麗大学校84人、漢陽大学校3人、西江大学校6人となっている。こうした訪問学生の受入を可能にしている一因は、英語による授業科目の増加が挙げられる。調査した4大学における2011年度の全科目に対する英語による科目数の比率はソウル大学校15%、高麗大学校35.7%、漢陽大学校30.8%、西江大学校21.4%となっている(中央一報大学評価、2011)。

3.2.1.2 グローバル人材育成を目的とした短期海外派遣プログラム

韓国は留学生派遣大国のトップ3である。私費留学生の数が多いこともあるが、大学が提供する派遣プログラムによる留学者数も増えている。4大学においても1~2学期間の交換留学プログラムや訪問留学プログラムに加え、夏季・冬季・春季休暇を利用した様々な短期海外派遣プログラムを提供している。短期海外派遣プログラムの代表的なプログラムといえば、語学・文化研修プログラムであるが、新たにグローバル人材育成に視点をおいた研修プログラムの開発が進んでいる。

近年4大学全てが取り組んでいるのが、グローバル・リーダーシップ育成を目的とした海外インターンシップやサービス・ラーニングのプログラムである。海外インターンシップにおいては必ずしも大学の休暇を利用した短期研修プログラムとは限らず、より長期間のプログラムもある。ソウル大学校と高麗大学校では、こうしたプログラムの提供は従来海外留学プログラムを提供してきた国際・オフィスではなく、グローバルリーダー育成に特化した専門のオフィスが提供している。まずソウル大学校では、キャリア開発センターのグローバルキャリア課で2007年からグローバル人財プログラム(Global Talent Program)の提供を始めた。本プログラムでは毎学期50人の学生を選抜し、事前トレーニングを行い、終了後に海外インターンシップへ派遣する。事前トレーニングは、インターンシップの探し方、英文履歴書作成、インタビュー対策に始まり、ビジネス英語やプレゼンテーションスキル、国際ビジネスマナーのトレーニングを行う。

一方、高麗大学校では2007年にグローバル・リーダーシップ開発センター(Global Leadership Development Center)を設置し、21世紀のグローバルリーダーに必要な物事の見え方や見方、知識、スキル、経験を修得するためのプログラムと海外インターンシッ

プの機会を提供している。こうした大学の動向に即して、2009年から教育科学技術部が運営する WEST (Work, English Study, and Travel) Program が始まった。本プログラムは年間 5,000 人の韓国人の大学生と卒業生を対象とした 18 ヶ月間のインターンシッププログラムである。内容は 5 ヶ月間の英語学習、12 ヶ月間のインターンシップ、1 ヶ月の見聞旅行となっている。今回調査した 4 大学でも本プログラムの学生募集を行っていた。

次にグローバル人材育成の視点から、留学先の多様化に向けた短期研修プログラムを実施、または企画している例を挙げておきたい。英語圏に偏りがちな留学先を多様化し、学生に世界の様々な地域での経験を促すため、ソウル大学校では 2011 年から北京、東京、ケニアで 5 週間の海外研修プログラムを開始した。これらのプログラムは教員が同行し、講義、フィールドワーク、現地学生との文化交流を取り入れたカリキュラムとなっている。一方、漢陽大学校ではグローバル化する社会において今後新興国の重要性が増すことを鑑み、これまでは学生があまり留学先の選択肢として考えることのなかったブラジル、メキシコ、南アフリカ等へ合計 500 人の学生を派遣するという 5 つの短期研修プログラムを企画していた。

3.2.2 留学生受入プログラム

3.2.2.1 英語によるサマープログラム

留学生受入促進の取り組みとして、4 大学は英語によるサマープログラムの実施を始めた。英語によるサマープログラムの提供は漢陽大学校が最も早く 1997 年から開始しているが、その他 3 大学はここ 10 年以内の取り組みである。サマープログラムは留学生を主な対象としているが、各大学に在籍する国内学生も受講可能である。高麗大学校では協定校に派遣予定の学生にサマープログラムの受講を勧めており、漢陽大学校では英語圏への派遣学生については義務化している。夏休みに多数の科目を英語で提供するために、各大学では大学の教員に加え、外国の大学、主に海外の協定大学の教員を招聘している。

サマープログラムは科目の種類と数から 3 つのタイプに分けられる (表 4)。まずは西江大学校が提供している韓国言語・文化に特化した異文化体験プログラムである。午前中に韓国語クラス、午後にセミナー形式の韓国文化・社会に関する科目 (4 科目から選択)、そして週 1 度のフィールド・トリップの組み合わせとなっており、異文化体験学習を重視したプログラムとなっている。毎年 50~60 名の留学生と 10~20 名の国内学生が参加する。

次にソウル大学校と漢陽大学校が提供する韓国や東アジア地域の学習を主目的としたエリア・スタディ・プログラムである。40 科目程度が提供され、その多くが韓国や東アジアの文化・社会に関する科目であり、フィールド・トリップも提供されている。ソウル大学校では約 500 人、漢陽大学校では約 700 人の留学生が受講する。

高麗大学校のプログラムでは 110 以上の科目を提供しており、より多様な学問分野の学生のニーズに応えられるプログラムとなっている。その受講生数は留学生約 1,300 人、国

グローバル化時代の国際教育交流プログラムの在り方
— 韓国の4大学の事例から —

内学生約 200 人、合計 1,500 人に上る。その科目数と受講生数から、通常の学期に夏学期が追加されたようなサマープログラムとなっている。

表 4. サマープログラムの3つのタイプ

サマープログラムのタイプ	内容	参加者数	各大学のプログラム名と期間
異文化体験プログラム	韓国語クラス、セミナー形式の韓国文化・社会に関する科目（4科目から選択）、フィールド・トリップから成る体系的なプログラム	80人程度 (留学生 50~60人 + 国内学生 10~20人)	西江大学校： Sogang Korean Studies Summer Program (5 weeks : 6/25-7/27)
韓国・東アジアのエリア・スタディ・プログラム	40科目程度から自由に選択 韓国や東アジアの文化・社会に関する科目が中心 韓国社会・文化学習を目的としたフィールド・トリップ有	ソウル大学校： 500人程度 漢陽大学校： 700人程度	ソウル大学校： International Summer Institute (5 weeks : 6/26-7/30) 漢陽大学校： International Summer School (4 weeks : 7/1-7/26)
夏学期型プログラム	110科目以上から自由に選択 多様な学問分野の学生のニーズに応えられる科目の種類と数	1,500人程度 (留学生 1,300人 + 国内学生 200人)	高麗大学校： International Summer Camp (6 weeks : 7/1-8/8)

(出典) 4大学のサマープログラムのウェブサイトとインタビューデータから筆者作成

3.2.2.2 語学堂での韓国語・文化プログラム

韓国の大学では一般的に大学付属の教育機関として語学堂（語学学校）を併設している。語学堂は独立した教育機関であり、韓国語や英語の他に、様々な外国語のクラスを社会一般に提供している。韓国の大学では多様な留学生を受け入れるために、大学の正規教育課程の外国語科目として提供する韓国語科目のほかに、語学堂でより多様なレベルの韓国語・文化研修プログラムの提供に努めている。4大学とも大学付属の語学堂を併設しており、そこでは多くの語学研修生が学んでいる。2012年度の各大学の語学研修生が留学生に占める割合は、ソウル大学校 22%（語学研修生数：521人）、高麗大学校 26%（同：656人）、漢陽大学校 18%（同：395人）、西江大学校 54%（同：596人）となっている（大学アリミ）。

また大学に在籍している学位課程の留学生や交換・訪問留学生等も語学堂のクラスを受講できるが、大学の授業料とは別に語学堂に授業料を納める必要がある。しかし、交換留学生に関しては特別処置を取っているケースが見られた。例えばソウル大学校と漢陽大学校では、受入れた交換留学生の母国大学での専攻が韓国文化研究の場合、語学堂の韓国語クラスの授業料を免除、それ以外の交換留学生に関しては半額にしている。さらに西江大学校では近年交換留学生向けに夜に韓国語コースの提供を始めた。日中は大学で通常の授業科目を履修し、夜に韓国語の学習ができるよう配慮している。4大学では英語による授

業科目数を充実させており、交換・訪問留学生に韓国語力を要求していない。しかし、多くの交換・訪問留学生が韓国語の習得を留学の目的の一つとしているケースが多く、また正規教育課程の韓国語科目（外国語としての韓国語教育科目）はレベルや種類が限られていることから、語学堂を活用することによりこうした留学生の学習ニーズに応えている。

3.2.3 国際共同学位プログラム

調査した4大学では、約10～20のダブル・ディグリー・プログラム（以下、DDPと記す）の協定をそれぞれ締結していたが、ジョイント・ディグリー・プログラム（以下、JDPと記す）の協定はなかった。JDPは、外国の大学との共同学位授与を法律上認めていないため実施に至らないというケースが聞かれるが、韓国では法律を改定し、この問題を解決している。高等教育法第21条（教育課程運営）および高等教育法施行令第13条（外国大学との教育課程の共同運営）の改定により、外国政府または外国政府公認の評価機関の認証評価を受けた海外の大学と共同で学士課程および大学院教育課程の運営、また必要な場合には国内の大学と外国の大学との共同名義による学位授与が可能になった。しかしながら、JDPは外国の大学と共同で一つの教育課程の提供となる。そのためDDP以上に、カリキュラム開発が複雑なプロセスとなり、実施するのが難しいという意見も聞かれた。またJDPは学位が一つしか授与されないが、DDPは学位が二つ授与されることから、学生はDDPにより価値を見出すため、JDPのニーズは高まらないのではないかという意見もあった。

今回調査した4大学ではDDPの学位課程は大学院レベルが圧倒的に多かった。これらのプログラムについて、4大学中3大学は大学院レベルのみ、または1プログラムを除きすべて大学院レベルのプログラムであった。漢陽大学校が唯一、学部レベルと大学院レベルのDDPの数がほぼ同数であった。またDDPが提供されている学問分野は、工学、MBA、国際学に集中していた。

外国の大学とのDDPは国際教育交流の新しいモデルであり、近年急速に増加してきている。今回調査した大学の中には、まだ協定書の締結が優先している段階で実際のプログラムの稼働はこれからという大学も見られた。

4. 日本の大学への示唆

調査した4大学ではグローバル人材育成の観点から、国際的な学生交流の更なる促進の重要性について共通認識を持っていた。留学や海外研修を通して、グローバルな視点から課題を見つけ、より広い社会に貢献しようとする人材の育成が重要であり、留学生の受入もキャンパスにおける国内学生の国際化への貢献が期待できるといった意見が聞かれた。留学や海外研修はもはや一部の学生が異なるまたはユニークな経験を得るための教育プログラムではなく、全ての学生がグローバル化する社会で活躍するために参加すべき教育プ

グローバル化時代の国際教育交流プログラムの在り方
— 韓国の4大学の事例から —

プログラムであると認識されるようになってきたと言えるだろう。4 大学はこれからの若者の誰もがグローバル化社会への適応が求められるということを念頭に国際教育交流に取り組んでおり、その取り組みにおいて、1) 海外派遣の機会の拡大と多様化、2) 留学生と国内学生への国際的な教育機会の提供またその準備としての英語による科目の充実、そして3) 大学付属の語学堂（語学学校）での韓国語教育科目（外国語としての韓国語習得）の提供という3つの共通点が見られた。

4 大学は、より多くの学生を派遣するために様々な短期留学プログラムや訪問学生プログラムの開発・提供に努めていた。年間1,000人以上の学生派遣を実現している漢陽大学校では、今後の学生派遣促進のあり方について議論が進んでいた。留学希望者の派遣環境が整い、今後は留学を考えたことはあるが実行に至っていない学生層を対象にしたプログラムの開発が必要であるという声が聞かれた。またグローバル人材育成のため、ブラジル、メキシコ、南アフリカといった新興国を留学先として選定し、グループで学生を派遣する研修プログラムを企画していた。同様に1,000人以上の学生を派遣している高麗大学校では、派遣プログラムの多様化を図るとともに、これまでの学生派遣の選考基準を見直した。大規模な学生派遣数に適した選考基準にするため、成績条件をCGPA3.0から2.8に下方修正する一方で、面接を導入し、学生の人間性を含めた総合的な選考基準を導入した。より多くの学生に海外で学習する機会を提供するためには、学生のニーズに適した多様なプログラムを開発・提供するとともに、派遣する学生の適性をどう見極めるかも重要な課題になる。

また、留学にかかる経済的負担の軽減も重要な課題の一つである。4 大学では派遣学生を対象として、政府や企業の奨学金のほか大学独自の奨学金を用意していた。また、4 大学では学生派遣に特化した協定に基づいた訪問学生プログラムや第三者ネットワークの利用により、大学が留学先として認定する海外の大学を増やし、学費負担の軽減を図っていた。こうした認定大学への留学においては、自大学の授業料を免除し、訪問大学の授業料のみを納める制度を適用し、学生の経済的負担の軽減に努めていた。また認定大学で取得した単位は互換可能であり、計画的に単位を履修すれば卒業が延びることもなく、その点からも経済的負担の軽減に繋がる。

4 大学ではより多くの学生を派遣するために海外派遣プログラムの多様化を図る一方で、授業科目の英語化を推進し、留学生に新たな教育機会を提供するとともに、キャンパスにおける国内学生の国際化の取り組みへと発展させていた。特に留学生を受入れるために開始した英語でのサマープログラムは、世界共通語となりつつある英語で、言語文化背景の異なる留学生と国内学生の協働学習の機会の提供とも考えられる。サマープログラムでは海外からも教員を招聘するため、こうした教員から学ぶことも学生にとって一つの留学体験と言えるだろう。

英語による授業科目の提供促進は2004年に始まった留学生誘致政策である Study Korea Project の一施策であり、政府の財政支援があった。調査した4大学においては留

学生のみならず国内学生のためのカリキュラム改革の一環として推進されてきた。4 大学では一定数（3～5 科目程度）以上の英語による教養科目または専門科目の修得を卒業要件としている。さらに4 大学中3 大学は英語検定試験で一定以上の点数を取ることも卒業要件として課している。グローバル化に対応するための教育カリキュラムにおいて、英語は教養としてではなく、アカデミック・スキル及びグローバルなコミュニケーション・スキルとして重視されていることが伺える。

非英語圏の大学における英語による授業の学習の質の課題は常に議論されるところであるが、グローバル化する社会では大学教育において道具としての英語力の修得がより重要になっていることは否めない。英語力の習得が学生の学習機会を多様にし、協働学習者の国際化または多文化化をもたらす可能性が高いことから、英語で学ぶ教育カリキュラムの質の向上は一つの重要課題と言える。

最後に、英語で学ぶ環境を提供し留学生が増えたことにより、韓国語と韓国文化を学ぶ留学生向けのプログラムの拡充の必要性がより高まったことが、4 大学の事例から伺える。前述した通り、4 大学の留学生に占める語学研修生の割合は20～50%程度と高く、また交換・訪問留学生も10～20%と一定の割合を占めている。今後世界的にグローバル人材育成の施策として留学が重視されれば、交換・訪問留学生の数が増えることが予測される。この種の学生には、英語による専門・教養科目の修得と留学先の言語文化の習得を同時に目指すことを留学の目的とする場合が多い。留学生数の増加に伴い、多様化する留学の目的に対応するために、大学と併設する語学堂によりそれぞれの専門性を活かした教育プログラムを提供できるシステムは、今後日本の大学にとっても参考になる点が大い。

グローバル化が進む中、調査した4 大学は国際的な学生交流に対する学生の学習ニーズを踏まえ、世界的高等教育ネットワークの中でグローバル化時代の国際教育交流の在り方を追求していた。そして実質的な国際学生交流また国際教育交流を促進する原動力は、学長の強いリーダーシップの下で、大学の明確なビジョンを提示する積極的な姿勢とそのビジョンを具現化する実行力に他ならないと言えるだろう。

参考文献

- 太田浩（2011）「大学国際化の動向及び日本の現状と課題－東アジアとの比較から」『メディア教育研究』8（1）：S1-S12
- 韓国教育開発院（2007）「教育統計資料集 SM2007-10」
- 韓国教育統計サービス <http://kess.kedi.re.kr/index>（2014年3月15日取得）
- 韓国教育部 <http://www.moe.go.kr>（2014年3月30日に取得）
- 韓国教育部（2013）「高等教育の主要政策－推進現状及び今後の方向－」（全国大学校企画所長協議会の発表資料）」
- 韓国教育部（2014）「大学教育の質向上及び学齢人口減少に備えた－大学構造改革推進計画」

グローバル化時代の国際教育交流プログラムの在り方
— 韓国の4大学の事例から —

- 韓国経済研究院 (2011) 「教育関係法の改正方向と改正案 政策研究レポート」
大学アリミ <http://www.academyinfo.go.kr/> (2014年4月1日取得)
- 中央一報大学評価 (2011) <http://jedi.re.kr/> (2013年8月1日取得)
- 『中央日報』2012.10.29 「2020年まで優秀外国人留学生20万人誘致」
- 長島万理子 (2011) 「韓国の留学生政策とその変換」『留学交流』1 (2013年2月11日取得
<http://www.jasso.go.jp/about/documents/marikonagashima.pdf>)
- 日本学生支援機構 (2014) 「平成24年度 協定等に基づく日本人留学生状況調査」
- 日本学生支援機構 (2006) 「協定等に基づく日本人留学生状況調査 (平成16年度版)」
- 文部科学省 (2013) 「日本人の海外留学状況」
- e 国の指標サイト
http://www.index.go.kr/egams/stts/jsp/potal/stts/PO_STTS_IdxMain.jsp?idx_cd=1534
(2013年8月1日取得)
- Korea University (2012) *About Korea University*
- OECD (2013) *Education at a glance 2013: OECD indicators*, OECD publishing

事例 大学の国際教育プログラムに関する参考 URL

A) ソウル大 大学校

- 国際化教育プログラム (韓国語)
<<http://www.snu.ac.kr/students/international-programs>>
- Study Abroad
<http://oia.snu.ac.kr/02study_abroad/0201_01.html>
- Career Development Center: Global Talent Program
<<http://career.snu.ac.kr/>>
<<http://www.useoul.edu/notice?bm=v&bbsidx=70485&page=89>>
- International Summer Institute
<http://oia.snu.ac.kr/isi/isi_3_ctnt.jsp>
- Language Education Institute: Korean Language Education Center
<<http://lei.snu.ac.kr/site/en/klec/introduction/klec.jsp>>

B) 高麗大 大学校

- Global KU: Global Program
<<http://www.korea.edu/>>
- Global Leadership Development Center: Oversea Internship
<http://glfdc.korea.ac.kr/html/activity_eng_21.html>
- International Summer Camp
<<http://isc.korea.ac.kr/>>

- Korean Language & Culture Center
<http://klcc.korea.ac.kr/about/about01_eng.html>
- Korea University, 2012, “About Korea University”

C) 漢陽大学校

- Academic Exchange: Outgoing Students
<<http://www.hanyang.ac.kr/english/>>
- International Summer School
<<http://iss.hanyang.ac.kr/>>
- International Language Institute
<<http://www.hyili.hanyang.ac.kr/Eindex.html>>

D) 西江大学校

- 2013 新入生のための学校主管海外派遣プログラム説明会（韓国語）
<http://home.sogang.ac.kr/sites/goabroad/sister/_layouts/List_LAYOUTS/List2010/DispForm.aspx?List=0a5e5f16-4e2b-41cd-bef1-17f01e86db3f&ID=856&page=&lk=&lst=-1>
- International Program
<http://www.sogang.ac.kr/english/program/01_program.html>
- Sogang Korean Studies Summer Program
<<http://home.sogang.ac.kr/sites/esummer/Pages/default.aspx>>
- Korean Language Education Center
<<https://klec.sogang.ac.kr/>>

注記

本研究は科学研究費補助金(基盤研究B海外)「アジア高等教育における透過性(Permeability)のある教育フレームワーク構築に向けた比較研究 平成24年度～26年度」(代表: 広島大学・堀田泰司)の助成を受けている。

(わたべ ゆき 商学研究科講師、
きむ そんひ 独立行政法人大学評価・学位授与機構研究開発部特任准教授)